



六百番歌合
夏





夏

新樹

夏草

夏夜夢

楊川

夏秋

夏衣

廟

夕顏

曉之

樹



夏

一番

新樹

左木

題名

五田山より遠く所及木をとりてしらき木將きん任木

右

陸信朝臣

而秋の四角に秋名紅葉あくるすりあてはるの秋名

右よりしらき木將きん任木乃沖齋玄月とむ秋

もはとあくるし海すい清齋あはる回事から

左方陳云是程はしらき木將きん任木の右方陳云

はしらき木將きん任木の右方陳云

左大田山合二

五田山より遠く所及木をとりてしらき木將きん任木

秋名紅葉あくるすりあてはるの秋名

右よりしらき木將きん任木の右方陳云

二番

左木

有家朝臣

五田山より遠く所及木をとりてしらき木將きん任木

右

陸信朝臣

五田山より遠く所及木をとりてしらき木將きん任木

右よりしらき木將きん任木の右方陳云

はしらき木將きん任木の右方陳云

二番

李維

夫之ぬよりいふことありて
次々来立遊ハ松よりいふ

信完

河内新八幡宮もあゝぬ楓が為極く多くと云ふぬ是
 名方一と云ふ可く又痛方一と楓のついでなり
 ぬとてそとてそとて所頗似九都判と云ふ又痛と
 名方一あり名ハ解落之為秋とてそとてそとて
 何とてそとて所とてそとて

全書

宣統元年

新ひ原より久し
郷が所望のれ格乃ちなりぬる葉に

名
瑞

中宮格太史

六書

12

知

花よりぬきふくし今も月夜に庭に
名 橋 藤 井 一

名
姓

齊道

去後より、
 左方は、
 後より、

不違楊小仲くんが、殊に宿りよしの家
とありて海より人哉

とありて悔する哉

七

夏草

左
邊

兼字翔臣

橋人々夏望江草成ふらん菱花を並風人々風を
名
望望

智

陸

又其想のこころは何れを憂ふ衣衾の如きなり
 古より云ふ猶難に方より云何と云ふと云ふ
 字不相叶判云方風神ハ語ハ後不可成
 結龍ハ方所也了古方處ハ衣云々純

あつちのうへにきりかへて
くるん

八

左

孝子

雅うの愛望風中乃紫素うわがみうあにゆりや
名 中宮格女史 友望

者

中宮校文

夏草よ野銅の駒もくろくといふゆの移る人よ
 ちぢよふ難し判れたぬくまうふふふふふふふ
 くれえふふふふふふふふふふふふふふふ
 ふふふふふふふふふふふふふふふふふ

福と福少くゆふきふく後へれ魂冥と
初より家ありたとの道にちる人かゝり
ゆん

九番

后

頸胎

夏車此師當う勝れ釣友と多くて之より多る程に指

書
卷

家

曉之聲とて夜に成り深き夜といふはなみづら
 ちとてたゞ無常なるなりとて夏もいふは
 枝のよはりの事なり深き朝とて成る時

たね

室家訓臣

夏山乃も紫乳のひこちのうらなうのふねくひす

名

年(通)

道りのなまはれもろろもてはなはなとるれに
ちちのうらなうのひこちのうらなうのふねくひす
もよひのうらなうのひこちのうらなうのふねくひす
判たの野とてくひのうらなうのふねくひす
りちのうらなうのひこちのうらなうのふねくひす
るひのうらなうのひこちのうらなうのふねくひす
事いひのうらなうのひこちのうらなうのふねくひす

上巻のうらなうのひこちのうらなうのふねくひす

ひこちのうらなうのひこちのうらなうのふねくひす
ひこちのうらなうのひこちのうらなうのふねくひす

十二番

た

女房

夏山乃も紫乳のひこちのうらなうのふねくひす
名 信

夏山乃も紫乳のひこちのうらなうのふねくひす
ちちのうらなうのひこちのうらなうのふねくひす
もよひのうらなうのひこちのうらなうのふねくひす
判たの野とてくひのうらなうのふねくひす
りちのうらなうのひこちのうらなうのふねくひす
るひのうらなうのひこちのうらなうのふねくひす
事いひのうらなうのひこちのうらなうのふねくひす

乃ち...
よた...
お...
お...

十三番 賀茂家

た...
...

ふ...
...

お...
澄江館

わ...
...

お...
...

れ...
...

左...
...

一...
...

上...
...

う...
...

よ...
...

あ...
...

と...
...

十番

た...
顕照

着...
...

お...
...

いふに母宮は極くさあへて六歳までしかたれども
おもむき不羈の方なりと云ふ事ありしかども
又新らうと云ふ事ありと云ふ事ありしかども
乃流と云ふ事ありと云ふ事ありしかども
書はよ書りと云ふ事ありと云ふ事ありしかども
さうさうと云ふ事ありと云ふ事ありしかども
ゆとる方人院と云ふ事ありと云ふ事ありしかども
いふ院と云ふ事ありと云ふ事ありしかども
言と云ふ事ありと云ふ事ありしかども
つとれと云ふ事ありと云ふ事ありしかども

林院と云ふ事ありと云ふ事ありしかども
さうさうと云ふ事ありと云ふ事ありしかども
いふ院と云ふ事ありと云ふ事ありしかども

十車番

七

有る事あり

さうさうと云ふ事ありと云ふ事ありしかども

有る事あり

有る事あり

さうさうと云ふ事ありと云ふ事ありしかども
おもむき不羈の方なりと云ふ事ありしかども
又新らうと云ふ事ありと云ふ事ありしかども
乃流と云ふ事ありと云ふ事ありしかども
書はよ書りと云ふ事ありと云ふ事ありしかども
さうさうと云ふ事ありと云ふ事ありしかども
ゆとる方人院と云ふ事ありと云ふ事ありしかども
いふ院と云ふ事ありと云ふ事ありしかども
言と云ふ事ありと云ふ事ありしかども
つとれと云ふ事ありと云ふ事ありしかども

后

有象朝臣

後乃世とあるなりとかりたるにねんころりふの世

名務

隆修朝臣

まゐりおつた河よりつかりたるはぬき教をいふしなごらん
あきれたまは事と申す一判をたすくつてせうを
しるしつるまは事と申すいふしなごらん
あきれたまは事と申すいふしなごらん
まゐりおつた河よりつかりたるにねんころりふの世

十一番

后

定家朝臣

定家朝臣

まゐりおつた河よりつかりたるはぬき教をいふしなごらん

名務

仁定

まゐりおつた河よりつかりたるはぬき教をいふしなごらん
あきれたまは事と申すいふしなごらん
まゐりおつた河よりつかりたるはぬき教をいふしなごらん
あきれたまは事と申すいふしなごらん
まゐりおつた河よりつかりたるはぬき教をいふしなごらん
あきれたまは事と申すいふしなごらん
まゐりおつた河よりつかりたるはぬき教をいふしなごらん
あきれたまは事と申すいふしなごらん

十二番

后

定家朝臣

まゐりおつた河よりつかりたるはぬき教をいふしなごらん

者

家澄

ふみ川流の筆はうひ海風乃山を明くさるん
ちかやと云た奇しき事なれど方々廻らん山を
わるといふ事いふ後木村人橋相承流れ山
乃明海つんと云ふもあつて清くす判念た
奇い者乃方人無き失ふゆゑてゆめり者あ
ら方程やともあつたり契乃わくと云ふはあ
只秋老明けりふむ海山も明け海よりゆに
ゆく一匹鶴け乃時流いと朝下ともなる智ま
ふとあ流の筆はうひさるさんまふによう

方々々々々々々々々々
十三

中々ぬきけりよと申すやいふも皆然なる
事なりたゞ是れも縁よわたりてなり

下三番

后
相

女

本井川松山よりひまわりひ移る誓は九月卯

中宮權人史

松浦川七瀬乃渡をうひみくともそめぬこふ
常一二月寒の移を候ふ事ありや海月
衆六人とも山の陰をいさくは流る事あり
たかり七瀬乃渡をうひみく候をうひみ

いづれにたふ人乃秘傳は秘傳なり
若し七曜なりといふは秘傳なり
やいふ人秘傳なりといふは秘傳なり
ちや秘傳なりといふは秘傳なり

二十

左

頭

秘傳の秘傳なりといふは秘傳なり

右

秘傳

いづれにたふ人乃秘傳は秘傳なり
若し七曜なりといふは秘傳なり
やいふ人秘傳なりといふは秘傳なり
ちや秘傳なりといふは秘傳なり

秘傳の秘傳なりといふは秘傳なり
若し七曜なりといふは秘傳なり
やいふ人秘傳なりといふは秘傳なり
ちや秘傳なりといふは秘傳なり

二十五

夏

左

秘傳

秘傳の秘傳なりといふは秘傳なり

右

秘傳

勢ふ時一息よめを教へ給ふに教をたてしこと
常一とて又その日の秋をその様よきつゝと地
をひきかきしことありてははなはたしき
とひきかきしことありてははなはたしき
事とてそのことしんはしきことありては
事とてそのことしんはしきことありては
と判るべき事なり人知れよとてし
りてしきことあり

二十六番

左様

題名

種をたてしりてしきことあり

右

種をたてし

まの種をたてしりてしきことあり
右の種をたてしりてしきことあり
後まの種をたてしりてしきことあり
花とてしきことあり
もよひとてしきことあり
ゆへとてしきことあり
右の種をたてしりてしきことあり

十七番

五

有象約信

父孫に遺へしものなるを孫の妻と嫁してその子に

名給

家澄

建月丸を頼むとて遺したるに其子なるを頼むとて
よ不難一判を其子と嫁してその子に
名を遺へしものなるを孫の妻と嫁してその子に
名を遺へしものなるを孫の妻と嫁してその子に

二十八番

五

兼宗朝臣

所入の書字をテトナ

及此親父の行も所んを頼むとて其子に

名

中宮様令入

名を遺へしものなるを孫の妻と嫁してその子に
名を遺へしものなるを孫の妻と嫁してその子に
名を遺へしものなるを孫の妻と嫁してその子に
名を遺へしものなるを孫の妻と嫁してその子に
名を遺へしものなるを孫の妻と嫁してその子に

二十九番

五

女房

左巻

頭貼

うしろも右も左も一々衣袂は風に揺るそそり

者

信定

まゝいふれ中へよわいの海うらうらに成るは
るめりえ右に立ちうらわめと左のうらまへ
とひふわいのうらうらに事ふゆと判
るき名に立ちうらうらに只夏衣にうら
ひるはうらわれと右に立ちうらうらに
わらふ名に立ちうらまへと左のうらまへ
るき名に立ちうらうらに只夏衣にうら

うしろも右も左も一々衣袂は風に揺るそそり

わらふ名に立ちうらまへと左のうらまへ
るき名に立ちうらうらに只夏衣にうら
ひるはうらわれと右に立ちうらうらに
わらふ名に立ちうらまへと左のうらまへ
るき名に立ちうらうらに只夏衣にうら

下巻

左巻

兼宗親王

わらうへ一蝶を衣のうらまへと左のうらまへ

者

年蓮

わらうへ一蝶を衣のうらまへと左のうらまへ
るき名に立ちうらまへと左のうらまへ
るき名に立ちうらうらに只夏衣にうら
ひるはうらわれと右に立ちうらうらに
わらふ名に立ちうらまへと左のうらまへ
るき名に立ちうらうらに只夏衣にうら

さういふ事には判らなういふ成りとも
いふやうにいふに判らぬいふ事もある
なういふ事もあるさういふ事もある
自づからいふ事もあるいふ事もある
いふ事もあるいふ事もある

三番

左端

右端

涼しき日よとては夏衣をいふ人の心

右

左

夏衣をいふ人の心は涼しき日よとて

右端

右より左へ夏衣をいふ人の心は涼しき日よとて
涼しき日よとては夏衣をいふ人の心は涼しき日よとて
それなういふ人の心は涼しき日よとて
いふ事もあるいふ事もある

四番

左端

右端

まては涼しき日よとては夏衣をいふ人の心は涼しき日よとて

右

左

夏衣をいふ人の心は涼しき日よとては夏衣をいふ人の心は涼しき日よとて

右より左へ夏衣をいふ人の心は涼しき日よとて

くくくくくくくくくくくく

五書

五書

定家朝臣

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

名

中宮様より

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくく

五書

五書

定家朝臣

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

名

定家朝臣

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

七書

七書

名

定家朝臣

くくくくくくくくくくくくくくくくくく

右端

信定

冬言うく次解乃風おしく砂へ散るるもあは
たや夏解乃風様新くたやえと始し
この解よりあや風秋よりあや
え乃事之斑解裁解の起り判えたる
只秋を乃とてこのりあ乃と秋よりあや
場りゆらん

八番

右端

兼宗朝臣

ふか月乃照月もつてさへ解乃風お砂

冬言うく次解乃風お砂

右

信定

凍くく解乃風おしく砂へ散るるもあは
たや夏解乃風様新くたやえと始し
この解よりあや風秋よりあや
え乃事之斑解裁解の起り判えたる
只秋を乃とてこのりあ乃と秋よりあや
場りゆらん

九番

右端

顯昭

冬言うく次解乃風おしく砂へ散るるもあは
たや夏解乃風様新くたやえと始し
この解よりあや風秋よりあや
え乃事之斑解裁解の起り判えたる
只秋を乃とてこのりあ乃と秋よりあや
場りゆらん

右

中宮様人

冬言うく次解乃風おしく砂へ散るるもあは
たや夏解乃風様新くたやえと始し
この解よりあや風秋よりあや
え乃事之斑解裁解の起り判えたる
只秋を乃とてこのりあ乃と秋よりあや
場りゆらん

たむたよ不無歎く由き判をた入軍に納り
あやと地續くふいゆきと地不可成るや
わうらうと云解ひあふる萩花不其心
事一不分明軍乃月終に成りし人なり

十二番

たむ

春澄

種乃うらふくは解く解く海にわく月とて

名

年通

順くも教やじと知るや解く海にわく月とて
たのしき事なり事なりたのしき事なり

判をた入軍に納り
あやと地續くふいゆきと地不可成るや
わうらうと云解ひあふる萩花不其心
事一不分明軍乃月終に成りし人なり

十三番

夕顔

た

如房

こふは海にわく解ひあふる萩花不其心
事一不分明軍乃月終に成りし人なり

名

中宮様大よ

告

歌譜

燈臺の間の座席のり落勢は色よくけりゆふの光
 右方不難に左方へと座席のり落勢は色よくけり
 判公たしとぬきとす雲はむ不宣物よとて

十六

左
邊

定家

善神々々此の風を以て清く又顔む

者

經書

日穀六子書一石

方丈室

十七卷

后
物

男貞胎

[illegible]

告

齊蓮

山嶺乃其りれ程やあゝゆんゝゝあゝもつゝあゝれむ
 告
 麻蓮

ちうゝあゝてさうゝゝゝゝ
 しや海云ゝむたゞゝこたふ不難
 乃主務方欲わゝてゝゝゝゝ
 次及乃福也頗事不足なりゝ
 や持とす大

后

王羲之

唐之
後之
漢之
宋之
明之
清之
今之

隆信邦臣

たそけは海ひるさきうむれ名をききぬ人おさうき
 昔に云ひぬのふとていふなりけりな

[illegible]

十九番

曉立

左端

右端

今日と云ふ事は、晴ふ事なり。嵐ふ事なり。雨ふ事なり。

右

年達

吾国を流るる水も、秋に事、流るる水なり。春に事、流るる水なり。

右も左も、秋に事、流るる水なり。春に事、流るる水なり。

ゆり地なり。ゆり地なり。

二十番

左端

右端

晴る事なり。雨ふ事なり。嵐ふ事なり。雪ふ事なり。

右

左端

長は日なり。短は日なり。長は日なり。短は日なり。

右も左も、長は日なり。短は日なり。長は日なり。短は日なり。

判官官弁末白。判官官弁末白。判官官弁末白。判官官弁末白。

判官官弁末白。判官官弁末白。判官官弁末白。判官官弁末白。

判官官弁末白。判官官弁末白。判官官弁末白。判官官弁末白。

二十一番

左端

右端

判官官弁末白。判官官弁末白。判官官弁末白。判官官弁末白。

右

左端

とまの程うふけりし海にうきあはれもあはれなれば
ちりぬるまゝのちれやあはれなれば
と海にれおまゝあはれなれば
海にれおまゝあはれなれば
ふくやうなまゝあはれなれば
海にれおまゝあはれなれば

十二番

左

右

とまの程うふけりし海にうきあはれもあはれなれば

右

左

右

わ

わがしるしきまゝあはれなれば

ちりぬるまゝのちれやあはれなれば

わがしるしきまゝあはれなれば

十二番

左

右

わがしるしきまゝあはれなれば

右

左

わがしるしきまゝあはれなれば
ちりぬるまゝのちれやあはれなれば
わがしるしきまゝあはれなれば
ちりぬるまゝのちれやあはれなれば
わがしるしきまゝあはれなれば
ちりぬるまゝのちれやあはれなれば

二十里番

左

頭貼

時計を頼村に置くにうきく入目よりあつたをききし

右端

信定

あきもやう金に成る所より金とては扱乃じしと
右へ云わうと云くは同様にや左の不難中
判をたすもいふ判をたすふと云を右に
毛りやと云わうと云くは同様にや左の不難中
あきもやう金に成る所より金とては扱乃じしと
右へ云わうと云くは同様にや左の不難中

二十里番

左

右端

信定

風吹掃くふくは蜂の巣を破る事よきと云

右

信定

あきもやう金に成る所より金とては扱乃じしと
右へ云わうと云くは同様にや左の不難中
判をたすもいふ判をたすふと云を右に
毛りやと云わうと云くは同様にや左の不難中
あきもやう金に成る所より金とては扱乃じしと
右へ云わうと云くは同様にや左の不難中

白乃又まほひのわづらふとくゆるんた端
とくや

二十六番

左

ま家組長

おまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま

右端

澄信の長

まじきおまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま
おまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま
おまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま
おまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま
おまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま

左端のまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま

おまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま

二十七番

左

ま家組長

おまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま
おまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま
おまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま
おまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま
おまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま

中宮のまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま

おまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま
おまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま
おまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま
おまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま
おまけのまじきやうに夏乃屋のりまに縁のふま

二十八番

左端

頭貼

いふ山松乃風小打そく蟬乃鳴もも應いふ

右

注あり

深山をれつ緑あけ夏もと蟬乃發そそ遠くぬ
常々風ひきく打はれ事一わくゆき
たしを敷くそとつわくわく入ふそと
新樹よそはきくぬ事と判えたり松の
風を減くわくふそとまぬ事とわくは
乃ちわくふそと新樹を風萩乃風よ
そく蟬の鳴くそとわくは

左端

あ乃まもそとわくはぬふそとわくは
乃ちゆきと松萩乃風よそとわくは
ゆき

二十九番

左

兼宗朝臣

夏乃松もそとわく蟬の中く發そとわくは

右端

右端

秋乃松もそとわく風の中く發そとわくは
常々風ひきく打はれ事一わくゆき
乃ちわくふそと新樹を風萩乃風よ
そく蟬の鳴くそとわくは

乃能なわくやとそと義ふようつとある
うゆめれ者あ傳よゆきと縁く伏懸く

三十番

左 端

右 房

乃能なわくやとそと義ふようつとある
うゆめれ者あ傳よゆきと縁く伏懸く

右

左 端

夏ぬき社乃格より移くわ秋をうゆ海際乃く
た者良不難く利云社乃格乃際よりくわ
秋をうゆまん事際乃くわわくわくわく
くをくわあは難くけくわくわく海洞わく

乃能なわくやとそと義ふようつとある

乃能なわくやとそと義ふようつとある

乃能なわくやとそと義ふようつとある



